「あめのみかど」考

小久保 崇 明

一

『大鏡』の第五卷太政大臣道長上に、

①あめのみかとのつくりたまへる東大寺もほとけはかりはおほきにおはしますめれと猶この無量寿院にはならひた
まはす

という条がある。傍線の部「あめのみかど」は、語り手世次の詞中にある。この「あめのみかど」をめぐって、いさ
さか考えたい。

底本として、千葉本系の東松本を使用した^が、問題の箇所、同系の近衛本(甲)・平松本・桂宮本(甲)に異同はな
く、徳川本系の蓬左本にも、

「あめのみかど」考(小久保)

九三三(一三三一五)

あめの御門のつくり給へる東大寺も仏ばかりこそはおほきにおはすれと

とあり、同系の桂宮本（乙）・久原本（但し、「あめの御門」も異同がなく、流布本系の八巻本にも、

あめのみかとのつくり給へる東大寺も仏ばかりこそはおほきにおはしますめれど。

とあり、同系の古活字本にも異同がない。また、異本系の萩野本でも、

あめのみかとのつくり給へる東大寺も仏ばかりこそ大きにおはしますなれと

とあり、同系の披雲閣本にも、その異同はない。

『大鏡』に存在しているこの「あめのみかど」について、保坂弘司は、『大鏡全評釈』で、

「あめのみかど」という言い方について、『大鏡新註』は、聖武天皇のことを「天璽国押豊桜彦天皇」というの

で、その初めの「天」をとって言ったものか、それとも一般に天皇のことを「天つみかど」というので、これに

拠ったものかと注しているが、ここは藤原氏と区別して天皇を言ったものと考えられるから、後者であろう。⁽¹⁾

のごとく説く。

しかしながら、筆者の考えは、後者ではない。むしろ前者に近い。東大寺は、聖武天皇の発願によって創建された。

「あめのみかど」は、その聖武天皇を指していると捉えるのが、自然であると考えられるからである。『東大寺要録本

願章』に、聖武天皇のことを、「俗号国押是也⁽²⁾」とある。

なお、保坂氏は、聖武天皇のことを、「天璽国押豊桜彦天皇」というのを、大正末年になる関根正直の『大鏡新註』⁽³⁾を挙げているが、すでに、明治三十年刊の鈴木弘恭の『校大鏡註釈』に、

天の御門とは、聖武天皇のこと也、聖武天皇、御名、天璽国押開豊桜彦天皇と御系図并続紀等に見えれば、かくいふ也⁽⁴⁾

のごとく記述している。

『大鏡』の主な注釈書は、ほとんどすべて、聖武天皇と指示している。

更に、保坂氏は、関根正直の、一般に天皇のことを、「天つみかど」という考えに沿っているが、「あまつみかど」は、「天つ御門」で、皇居のことである。後述するが、「あめのみかど」とは、意味が異なっていることを指摘しておく。

なお、『大鏡』には、聖武天皇と呼称する例が、

② 一所は聖武天皇の御母后光明皇后と申ける今一所の御女は聖武天皇の女御にて女親王をそうみたてまつり給へりける女御子を聖武天皇女帝にすゑたてまつりたまひてけり

太政大臣 道長上

③ 元正天皇聖武天皇二代

太政大臣 道長上

④ それを聖武天皇と申御母をは光明皇后と申きいま一人の御女はやかて御甥の聖武天皇にたてまつりて

太政大臣 道長上

⑤ 又贈后の父聖武天皇ならひに高野の女帝の御祖父

太政大臣 道長上

⑥ 聖武の御母もおはしますよに后となりたまひて

太政大臣 道長上

など計八例（但し、一例「聖武」(⑥)、語り手世次の詞中に存在している。

「あめのみかど」という語は、既に、『万葉集』に、

⑦ 4480 恐かしこきや 天あめの御門みかどを「安米乃美加度乎」 かけつれば 音ねのみし泣かゆ 朝夕にして 卷第二十

のごとく存在している。この歌の作者は未詳であるが、「天あめの御門みかど」は、天皇みそのものを言っていると思念される。

平安時代における、主要な文芸作品に見出される「あめのみかど」の使用例をみる。『続日本紀』に、

⑧ 挂毛畏伎朕我天乃御門我帝皇天御命以天 卷三十 称徳天皇 第四五詔

の一例存在し、『古今和歌集』に、

⑨ 702 梓弓ひきののつづらすゑつひにわが思おもふ人ことのしげけむ

この歌ある人、あめのみかど近江のうねめにたまひけるとなむ申す 卷第十四 恋歌 四

のごとく、左注に一例顕在し、『三宝絵詞』に、

⑩ 天朝アノミカドフカクタウトヒ給テ一向ニ師トシ給テ天平十六年冬ハシメテ大僧正ノ職ヲサツケ給 中 三 行基菩薩

⑪ アメノ御門タカノノ御女母光明皇后淡海公娘高野ノ姫ト申御門比御時百万基塔ヲ作ノ御代神護景雲二年ヨリオコレル也 下 正月 (2) 御齋会

⑫ アメノ御門タウトヒ給テ東大寺ニスエテ供養シ給 下 正月 (5) 布薩

⑬ アメノ御門ノ東大寺及ヒ国々ノ国分寺ヲタテタマヘル事モコノ后ノス、メタマヘル所ナリ

下 三月 (13) 法花寺花厳会

⑭ 東大寺ハアメノ御門ノ立タマヘルナリ 下 六月 (2) 東大寺千花会

の五例存在し、『大鏡』に前掲の一例(①)、『袋草紙』に、

⑮ある書に云はく、「猿沢の池に身なげたる采女は、あめのみかどの御時」と云々。一名を天璽国押開豊桜彦天皇と号す。この故に、「あめのみかど」と云ふ。また平城宮に御すの故に、一名を「奈良帝」と称したてまつるか。これ二。

難者云はく、「古今目録」の如きは、「天の帝」と号するは天智天皇なり。如何」。

答へて云はく、「一件の帝一名を天命開別天皇とするの故なり。然りといへども件の帝においては、一切平城宮に御す。近江の天津の朝なり。同号をもつて両帝に用うる事、これをもつて知るべきか。これまた東大寺か。大同の帝の御願は聞かず。上巻

とあり、それに、『梁塵秘抄』に、

⑯274天の御門より、一童吾見こそ出でたまへ 衆生願ひをば 一童見こそ満てたまへ 卷第二
の一例がある。

なお、天福本『後撰和歌集』などには見出せないが、定家の初期に書写したという中院本『後撰和歌集』に、
⑰ 題しらず あめのみかとの御製

301秋のたのかりほのいほのとまをあらみわかころもては露にぬれつつ 第六 秋中
の一例存在している。

『竹取物語』『伊勢物語』『土左日記』『大和物語』『多武峯少将物語』『宇津保物語』『蜻蛉日記』『平中物語』『落窪物語』『和泉式部日記』『枕草子』『源氏物語』『篁物語』『紫式部日記』『堤中納言物語』『浜松中納言物語』『夜の寝覚』

『更級日記』『成尋阿闍梨母集』『雲州往来』『狭衣物語』『栄花物語』『讃岐典侍日記』『今昔物語集』『源氏物語絵巻』『古本説話集』『法華百座聞書抄』『打聞集』『仏教説話集』『宝物集』『松浦宮物語』『三教指帰注』や『拾遺和歌集』『後拾遺和歌集』『詞花和歌集』『金葉和歌集』『千載和歌集』（『新古今和歌集』『新勅撰和歌集』）などには存在していない。

「あめのみかど」は、奈良時代においても活動の勢を得てはいなかったようである。しかし「上代のことば」¹³と捉えられよう。

平安時代における「あめのみかど」についてみる。『続日本紀』の「あめのみかど」は、聖武天皇¹⁴を指し、『古今和歌集』のそれは、特定の天皇を呼称するのではなく、一般的な天皇¹⁵をいい、『三宝絵詞』の五例と『大鏡』の一例は、聖武天皇を指している。また、『袋草紙』の例は、天智天皇、聖武天皇説のコメントを紹介しており、中院本『後撰和歌集』の「あめのみかど」は、天智天皇を指示している。『梁塵秘抄』の一例は、「神々の住所である天界の門」¹⁷の意で使用されている。

三三

中世の主な文芸作品に存在している「あめのみかど」について考察する。次の、

⑱ あめのみかど¹⁸の御門^{みかど}御宇^{のぎよ}七年^{ねん}に、新羅^{しんら}の沙門^{しゃもん}道慶^{どうけい}、この剣^{けん}をぬすんで吾国^{わがくに}の宝^{たから}とせむとおも（ッ）て、ひそかに船^{ふね}にかくしてゆく程^{ほど}に、風波^{ふうは}巨動^{きよどう}して忽^{たちまち}に海底^{かいてい}にしづまんとす。

平家物語 卷第十一 剣

⑲ うらみわびたる猿沢^{さるさわ}の池^{いけ}

といふ句あり、これは昔あめのみかどの御時、采女といひし女に、あさからず契り給ひし、程なくおぼしめすてさせ給ひしを、采女うらみ奉り、
御伽草子 猿源氏草紙
のごとき例が顕在している。

前者、『平家物語』は、底本として龍谷大学図書館蔵の『平家物語』を使用した、日本古典文学大系に拠ったが、流布本系の、例えば、山田孝雄著の『平家物語』などに異同はない。しかしながら、『平家物語』における語り本系の、現存する最古の伝本、鎌倉時代の古鈔本、屋代本『平家物語』には、

天智天皇七年ニ沙門道鏡比剣ヲ盗ンテ新羅へ渡サントシケルニ⁽²⁰⁾

下巻 卷第十一

とあり、増補系ではあるが、山田孝雄が鎌倉時代の言語の調査にあたって、史料的に確実な本文と定めた延慶本『平家物語』に、

天智天皇位ニ即セ給テ七年ト申ニ、⁽²¹⁾

第六本 一九

と異同がある。従って、本文に不安がないわけではない。ともあれ、この「あめのみかど」は、天智天皇と捉えてよい。天智天皇は、『日本書紀』には、『天命開別天皇』とも称したことから、聖武天皇と同じく、「あめのみかど」と呼称されたか。

次に、後者『御伽草子』の「あめのみかど」について考える。帝との悲恋で猿沢の池にて、入水自殺に追いやられたこの采女の物語は、平安時代中期成立の『大和物語』に、

昔、ならの帝につかうまつる采女ありけり。顔容いみじうきよらにて、人人よばひ、殿上人などもよばひけれど、あはざりけり。そのあはぬ心は、帝をかぎりなくめでたき物になむ思(ひ)たてまつりける。帝召してけ

り。さて後のち又もめさざりければ、かぎりなく心憂うれしとおもひけり。(略)(帝八)池いけのほとりにおほみゆきしたまひて、人々に歌うたよませ給たま(ふ)。柿本かきのもとの人麿、

わぎもこのねくたれ髪がみを猿沢さるさばの池いけの玉藻たまもとみるぞかなしき

百五十

とある。『御伽草子』の「あめのみかど」が、『大和物語』では、「ならの帝」となっている。この「ならの帝」は、同『大和物語』の百五十三段に、

平城ならの帝位みかどにおはしましける時、嵯峨さかの帝みかどは坊ぼうにおはしましてよみてたてまつりたまうける

と、第五十一代平城天皇と記述されている。平城天皇を後世、「あめのみかど」とも呼称したのであろう。同じ内容の物語が、中世の『十訓抄』にも、

我朝奈良ノ御門御時、サハノ池ニ身ヲナゲシ采女ハ、カナキ契ヲ心ウク思入タルハカリ

第六―三

と、「奈良ノ御門」として、一例ではあるが顕在している。

「ならの帝」は、平城天皇と捉えるのが自然である。しかしながら、百五十段の終章には、この帝が、人々に挽歌を求める。その折、柿本人麿が、歌を詠んでいる。柿本人麿の活躍していた時代は、第四十二代、文武天皇の頃である。従って、「奈良の帝」は、文武天皇であるとの説も出て⁽²³⁾いるが、これは、「伝承の途中でさまざま虚実がからみあつてできあがった話であり、平安時代よりもっと古い時代の天皇と采女うねの物語として受けとめればよい⁽²⁴⁾」のではないかと、筆者も考えている。従って、「ならの帝」を、平城天皇と捉えたい。

なお、平城天皇の諡は、「日本根子天推国高彦天皇⁽²⁵⁾」である。『広辞苑』は、「ならのみかど」を、「平城天皇の別称⁽²⁶⁾」と記述している。

また、謡曲「采女」に見える、次の「天の帝」の二例は、

⑳シテ「これは昔采女と申しし人、この池に身を投げ空しくなりしなり。されば天の帝の御歌に、あめみかど おんうたへ吾妹子が寝ぐ

たれ髪を猿沢の、がみ「池の玉藻と見るぞ悲しきと、詠める歌の心をばしろしめされ候はずや。」

ツレ「げにげにこの歌は承り及びたるやうに候。詳しく御物語り候へ。」

シテ「さらば語つて聞かせ申し候ふべし。〈語り〉昔天の帝の御時に、あめみかど おん一人の采女ありしが、ひとり(略)

天皇の尊称と捉えて問題はないであろう。

四

主要な古語辞典の「天の御門」の解説について考える。

『日本国語大辞典』には、

朝廷。転じて、天皇の尊称。万葉—二〇・四四八〇「畏きや安米乃美加度(アメノミカド)をかけつれば哭のみし泣かゆ朝夕にして〈作者未詳〉※古今—恋四・七〇二・詞書「このうたは、ある人、あめのみかとのあふみのうねめにたまひけるとなむ申す」※観智院本三宝絵・中「天朝(アメノミカド)ふかくたうとび給て」²⁸⁾

とあり、『広辞苑』には、

朝廷を尊んでいう語、また、天皇にもいう。万二〇「かしこきや——を」²⁹⁾

とあり、『古語大辞典』には、

(天子の宮殿の意から) 朝廷。天皇の敬称。「かしこきや——」〔安米乃美加度〕をかけつれば哭(ね)のみし泣かゆ

「あめのみかど」考(小久保)

朝夕(ひよ)にして」〔万葉・二〇・四四八〇〕「このうたは、ある人、——の近江の采女(うね)に賜ひけるとなむ申す」〔古今・恋四・七〇二・左注³⁰⁾〕と記述している。

これらは、筆者の考えに沿ってはいない。次に掲げる、『角川古語大辞典』の説述は注意してよい。

あめのみかど 「天御門・天帝」名曰天の御門の意で、天子の宮殿、または天皇をあがめていう。「かしこきや安米乃美加度(あめのみかど)・崩御サレタ天武天皇」をかけつればねのみし泣かゆ朝よひにして」〔万葉・四四八〇〕□人名。『古今・恋四』の「梓弓ひきののつづらすゑつゐにわがおもふ人にことのしげけん」の左注などに「この歌は、ある人、あめのみかどの近江の采女にたまひけるとなむ申す」とあり、天智天皇とも聖武天皇ともいう。『後撰・秋中』「秋のたのかりほのいほの」の作者を、中院本は「あめのみかどの御製」とし、天智天皇をあがめていったことが知られる。さらに采女(うね)との贈答の説話が「大和・一五〇」に「ならの帝」とあることなどにより、文武・聖武・平城天皇を当てる諸説が生じてくる。「昔、天の帝の御時に、一人の采女(うね)ありしが」〔謡・采女³¹⁾〕のごとく説いているからである。

筆者の調査により、辞典的記述を施すと、おおよそ、

あめのみかど 「天御門・天帝」名曰(あめのみかど)天の御門。天の御門より、一童(いちどう)吾兒(あこ)こそ出でたまへ」〔梁塵秘抄 卷第二〕(2) 天皇の尊称。「恐(かしこ)きや 天の御門(あめのみかど)を(安米乃美加度乎)かけつれば 音(ね)のみし泣かゆ 朝夕にして」〔万葉・二〇・四四八〇〕「この歌ある人、あめのみかど近江のうねめにたまひけるとなむ申す」〔古今・一四・

七〇二左注〕「語り」昔天の帝の御時に、一人の采女ありしが〔略〕〔謡曲 采女〕□人名(1)天智天皇。「題しらず あめのみかとの御製 秋のたのかりほといほのとまをあらみわかころもては露にぬれつつ」〔中院本『後撰』六・秋中〕「あめの御門御宇に、新羅の沙門道慶、この剣をぬすんで」〔平家・一一 剣〕(2)聖武天皇。「挂毛畏朕 天乃御門帝皇 御命以天」〔続日本紀 三十 称徳 四五詔〕「アメノ御門タウトヒ給テ東大寺ニスエテ 供養シ給」〔三宝絵詞 下 正月 (5)布薩〕「あめのみかとのつくりたまへる東大寺もほとけはかりはおほきにおはしますめれと」〔大鏡 太政大臣道長上〕「聖武皇帝俗号天帝是也」〔東大寺要録本願章第一〕(3)平城天皇。「うらみわびたる猿沢の池」といふ句あり。これは昔あめのみかとの御時、采女といひし女に、あさからず契り給ひし、程なくおほしめしすてさせ給ひしを、采女うらみ奉り、「御伽草子 猿源氏草紙」(4)付記 文武天皇説。『御伽草子』の「あめのみかど」に、文武天皇説がある。帝との悲恋で、猿沢の池にて入水自殺した采女の物語は、『大和物語』に、帝を限りなくめでたき物に思っていた采女を「帝召してけり。さて後又もめさざりければ、かぎりなく心憂しとおもひてけり。(略) (帝ハ) 池のほとりにおほみゆきしたまひて、人々に歌よませ給(ふ)。柿本の人麿、わぎもこのねくたれ髪を猿沢の池の玉藻とみるぞかなしき」(百五十)による。人麿の活躍していた時代の帝は、第四十二代文武天皇の頃である。しかしながら、これは言われるように、伝承の途中でさまざまな虚実がからみあつてできあがつた説話であり、平安時代よりもっと古い時代の天皇と采女の物語としてうけとめればよいとも考えられる。

のいごとくになる。

平安時代の「あめのみかど」について、山田孝雄に見解がある。山田は、「あめのみかど」は、「仏者の間に行はれし」位相語と説く。偏傾して存在する「あめのみかど」から見出された結論であろう。『三宝絵詞』ではそのように言うことができるかと思われるが、『大鏡』に一例顕在している「あめのみかど」についてはいかがであろう。筆者は、『大鏡』の世次の詞中に存在している「あめのみかど」は、むしろ東大寺建立の聖徳天皇を強く意識しての表現と考えている。

- (1) 『大鏡全評釈 下巻』(学燈社 一九七九年) 三七二頁
 - (2) 『東大寺要録本願章第一』(『続々群書類従 第十一』一九〇七年) 二頁
 - (3) 明治書院 一九二六年 二七五頁
 - (4) 卷之七 六六頁
- 『校大鏡註釈』と同時期、即ち一八九七年に刊行された『大鏡洋解全』(落合直文・小中村義象共著 明治書院)には、「諸寺略記に東大寺者聖武天皇御宇平城宮御宇勝宝感真聖武天皇諡稱天璽国坤問豊楼彦命所建立云々」(卷七) 一〇三頁とある。
- (5) 鈴木弘恭『校大鏡註釈』(青山堂書房 一八九七年 卷之七 六六頁) 国史大系『大鏡』(経済雑誌社 一九〇一年 六五〇頁) 池辺義象『大鏡』(博文館 一九一四年 一八〇頁) 佐藤球『校大鏡』(明治書院 一九二二年 二四七頁) 小林栄子『大鏡活釈』(大同館書店 一九二五年 二七七頁) 池辺義象『新註大鏡』(田中宋栄堂 一九二六年 五七七頁) 佐藤球『大鏡詳解』(明治書院 一九二七年 五六七頁) 龍沢良芳『参考大鏡新釈』(秀英社 一九二八年 三九三頁) 松本竜之助『参考大鏡詳解』(受験研究社 一九二九年 五九二頁) 塚本哲三『大鏡』(有朋堂書店 一九三一年 二〇二頁) 藤田豪之助『大鏡』(大倉広文堂 一九三二年 二九五頁) 和田英松『大鏡』(岩波書店 一九三一年 一九五頁) 三浦圭三『校標準大鏡』(啓松

堂 一九三三年 三五七頁) 橘純一『挿大鏡通釈』(瑞穂書院 一九三四年 二九八頁) 三浦圭三『大鏡新釈』(成光館書店 一九三四年 三五七頁) 平泉澄『大鏡』(春陽堂 一九三六年 一八四頁) 遠藤元男『訂校大鏡』(雄山閣 一九三七年 一八七頁) 五十嵐力『大鏡』(非凡閣 一九三八年 三七五頁) 尾上八郎『大鏡』(神田出版株式会社 一九四九年 二一九頁) 水田勇賢『大鏡新解』(良文館 一九五二年 七〇六頁) 橘純一『原文対照大鏡新講』(武蔵野書院 一九五四年 四七二頁) 石川佐久太郎『大鏡講義』(風間書房 一九五五年 一九一頁) 松村博司 日本古典文学大系『大鏡』(岩波書店 一九六〇年 二二七頁) 岡一男『大鏡』(朝日新聞社 一九六〇年 二九〇頁) 次田潤『大鏡新講』(明治書院 一九六一年 四七五頁) 岡一男『大鏡』(筑摩書房 一九六二年 一四四頁) 石川徹 新潮日本古典集成『大鏡』(新潮社 一九八九年 二八一頁) 松村博司『大鏡』(岩波文庫 岩波書店 一九九〇年 二二六頁) 橘健二・加藤静子^{新編}日本古典全集『大鏡』(小学館 一九九六年 三四八頁) 河北騰『大鏡全注釈』(明治書院 二〇〇八年 四五四頁)、他に、白田甚五郎『新大鏡』(奥付なし)がある。これらは、何れも、「あめのみかど」を聖武天皇とする。

(6) 澤潟久孝『万葉集注釈卷第二』(中央公論社 一九五八年) 三七七頁

『日本国語大辞典第一卷』には、

あまつ御門(みかど) 皇居の御門。転じて、皇居。※万葉一・一九九「明日香の 真神(まかみ)の原に ひさかたの天都御門(あまつみかど)を かしこくも 定めたまひて (柿本人麻呂)」四二一頁(小学館 一九七二年)とあり、
『角川古語大辞典第一卷』には、

あまつみかど『天つ御門』名「みかど」は門の敬語で、門に代表される住居、すなわち、天皇の御殿、皇居の意。天皇が住居をしめて天下を治める殿舎。「ひさかたの天都御門(あまつみかど)をかしこくも定めたまひて」(万葉・一九九)(角川書店 一九八二年) 一三四頁

(7) 日本古典文学全集『万葉集』(小島憲之・木下正俊・佐竹昭正校注・訳 小学館 一九六二年) 四六六頁

澤潟久孝『万葉集注釈 卷第廿』(中央公論社 一九六八年) 二二二頁

(8) 他に、墨滅ち歌の左注に次の一例がある。

「あめのみかど」考(小久保)

1108 いぬがみのとこの山なるなとり河いさとこたへよわがなもらすな

この歌ある人の、あめのみかどの近江のうねめにたまへりと

卷第十二

(9) 『天朝云々』天朝の訓本書『アメノミカト』と旁書せり。前田本には、『天帝』とせり。山田孝雄『三宝絵略注』（宝文館一九五一年）一四五頁

(10) 「ある書は未詳」新日本古典文学大系『袋草紙』（藤岡忠実 岩波書店 一九九五年）四六頁、脚注一。

(11) 山田孝雄『三宝絵略注』で、「古今目録で天智天皇を『天帝』と称する箇所はない」四六頁、脚注二。

(12) 天福本・貞応二年本・堀川本・二荒山本・片仮名本など「あめのみかど」が、次のごとく、天智天皇とある。天福本で示す。

題しらず

天智天皇御製

302 秋の田のかりほのいほのとまをあらみわが衣手はつゆにぬれつゝ、

卷六 秋中

(13) 日本古典文学大系『御伽草子』（市古貞次 岩波書店 一九五八年）一八三頁、頭注一八。

(14) 新日本古典文学大系『続日本紀 四』（青木和夫・稲岡耕二・笹山晴生・白藤礼幸 岩波書店 一九九五年）二五八頁、脚注三。

(15) 『古今和歌集全註釈 下』（竹岡正夫 右文書院 一九七六年）三六三頁。なお、竹岡の「あめのみかど」の語釈は、主要な文献を踏まえた立論で、有益。

(16) 山田孝雄は『三宝絵略注』で、「本書には専ら聖武天皇を指せること上の如し」（二四五頁）と記す。

(17) 新潮日本古典集成『梁塵秘抄』（榎克明 新潮社 一九七九年）一一八頁。日本古典文学全集『梁塵秘抄』（新聞進一小学館 一九六七年）は、「『天^あの門と』。高間原^{たかまがはら}の神の宮殿の関門」と注を付す。（二六四頁）

(18) 高木市之助・小沢正夫・渥美かをる・金田一春彦『平家物語 下』（岩波書店 一九六〇年）三四八頁

(19) 宝文館 一九三三年 四五七頁

(20) 『屋代本平家物語 下卷』（佐藤謙三・春田宣共編 桜楓社 一九七三年）四四九頁

- (21) 『延慶本 平家物語 本文篇 下』(北原保雄・小川栄一共編 勉誠社出版 一九九九年) 四一五頁
- (22) 卷第二十七
- (23) 例えば、阿部俊子・今井源衛校注 『日本古典文学大系『大和物語』』(岩波書店 一九五七年) 「ならの帝」の頭注二に「文武・聖武・平城の諸説がある。(略) 但し、人麿と共に歌をよんだという文武天皇の頃まで遡らなければならぬ(略)」(三三二頁) とある。
- (24) 『日本古典文学全集『大和物語』』(高橋正治校注・訳 小学館 一九七二年) 「ならの帝」三九七頁、頭注一五。
- (25) 高柳光寿・竹内理三編『角川日本史辞典』(角川書店 一九七四年) 八五二頁
- (26) 「平城天皇の別称」(三版 岩波書店 一九八三年) 二二五頁
- (27) 『日本古典文学全集『謡曲(1)』』(小山弘志・佐藤喜久雄・佐藤健一郎校注・訳 小学館 一九七三年) 二五三頁、頭注一三。
- (28) 第一卷(小学館 一九七四年) 四四一頁
- (29) 三版(岩波書店 一九八三年)
- (30) (小学館 一九八三年) 七一頁
- (31) 第一卷(角川書店 一九八二年) 一四七・一四八頁
- (32) 『三宝絵略注』 一四五頁